

第十九話 虫けらの知恵

皆様は、こんな話をご存じでしょうか？ それは有名な昆虫学者フーブルの著書の中に読まれるある種の昆虫の生態であります。その昆虫というのは、日本でくまん蜂と呼ばれる蜂の一種なのですが、この蜂は産卵期になりますと、自分の体よりもずっと大きな、たとえば蟬のような他の虫を襲います。そしてとびかかるや否や鬣髪を容れず、その昆虫のおなかのある一点を、自分の針で一突きします。その一点というのが目に入らぬほど小さな場所ですが、実は、その昆虫の運動神経の中枢に当たるので、刺された昆虫は、ずっと生き続けてはおりますが、ただからだの運動がすることができなくなってしまうのです。その身動きできなくなった昆虫の生きたおなかのひふの下に、蜂は卵を生みつけます。やがて卵からかえった蜂の幼虫は、運動神経のまひした昆虫の生きたからだをえさとして成長して行くのです。これは、そのくまん蜂が大昔から繰り返して来た産卵の方法だということです。

また、くもの一種で「落とし戸ぐも」と呼ばれる昆虫の、巣を作る技術をご紹介します。

このくもは柔らかな土地を選んでそれを掘り、深さ八櫃、直径一櫃半位の細長い円筒形の巢を作るのですが、その時、その内面をしっくいで固めてから、その出口に「落とし戸」を作るのでたいへん有名です。その戸をちょうど円筒形の上部にびたりとはまるように、円形に作り、そして、三十本ばかりの繊維でもって、その戸の一方を円筒形の上部にしっかりと結びつけますから、戸はちょうどどちらうつがいでとめたようになり、押し上れば開き、放すと閉まる「落とし戸」になります。ところで、も一つ不思議なのは、そのちょうどがいと反対側にある円筒形の上部に、三十個ぐらいの半円形の穴が並んであけられるのです。それは意味のないことではないので、外部から侵入者が入り返もうとすると、くもは頭の上の落とし戸をしっかりとつかまえると共に、あまった足をこの穴に引っかけて、あけられぬようにがん張るのです。つまり、侵入者を守るための足がかりとして、この穴は実に不思議な役割を果たしているということです。

最後に、もう一つ面白い例を上げておきましょう。かっこう鳥に属するある種の鳥は、決して自分の卵を自分で暖めようとしなくて、必ず他の鳥、主としてうぐいすであります。他の鳥の巣を捜してそこに卵を生み落として行きます。すると、うぐいすはそれを自分の卵と一緒に暖め、かえし、そしてえさを与えて一人前のかっこう鳥に育つまでめんどろを見てやるというのです。かっこう鳥はなんと狡猾でなまけ者だろうと人々は笑っていたのですが、実は、そうではなかつ



たのです。そのわけをかつこう鳥自身知ってはいないでしょうが、それには深いわけがあったのでした。かつこう鳥は大自然の広大な王国において森の番人という役目を受け持ったのです。森の木を食い荒らす無頼漢のような毛虫を徹底的に追い払う役割になったのです。かつて、この毛虫の害は非常に恐ろしいものであって、そのまま放置しておきますと、鬱蒼と茂った森林も数週間で丸裸にされてしまうくらいに、猛威を振るったと言われています。けれど、情容赦もなくこの害虫を食い尽くしてくれる、かつこう鳥がいてくれるおかげで、天然の宝庫は無疵に守られるのですがそのためには、かつこう鳥は自分の卵を自分で暖める時間も持たないのです。けれども卵をかえさなかったならば、かつこう鳥の種族はたちまち断絶してしまうでしょう。そこで、かつこう鳥は卵を自分で暖めるという任務から解放され、他の鳥が代わってそれを暖め、かえし、育ててくれることになり、かつこう鳥は安心して、森の小さな盗人たちの討伐に専念することができるようのです。

さて皆様、以上三つの例を取り上げてみましたが、第一の例は、種族保存のための攻撃の最も巧みな手段を示しており、第二の例は、防御のためのすばらしい知恵を、第三の例は、相互協定の妙味を現わしています。攻撃し、防御し、そして、ときには相互に協定を結んで助けあう。しかも、そこに現われた驚くべき賢さ……真に大自然の姿は、ひとみをすえて見れば見るほど、それを細かく分析すればするほど、なんとも言えない造化の妙を示していて、ただ驚嘆するばかりです。

ところで、このような生物の知恵を私たちは本能と呼んでいます。生物学の教科書をひもとくまでもなく、すべての生きものには、本能と知能という二つの働きがあって、本能が非常にすぐれているものは知能が低く、知能の発達のないものに反比例して本能の方が弱まっていることは、ご承知のとおりであります。知能とは、習い、覚え、反復しつづだんだんと進歩上達するものです。が、本能は、模倣にも教育にもよらず、生まれつきに備わっている能力であると言われます。

皆様に、ここでご注意願いたいことは、私たちはだれでも、そのことをその点まではなんのちゅうちょもなく、はっきりと認めるのですが、それから先のことについては、なんの疑問も起こさうとはしないということです。どうして、もう一歩進んでそこに「なぜ？」という問いを發してみようとしなないのでしょうか？

昔、イエズス・キリストを裁いて十字架の刑を宣告したローマ総督ポンシオ・ピラトは、自分の目の前に引き据えられた捕われのキリストの口から「私は真理に証明を与えようとて来たのだ。」という言葉聞き「真理とはいったい何なのか？」とキリストに問い返しましたが、ふとした好奇心でそう聞いてみたただけなので、別にキリストの返答を待つつもりもなく、そう聞き返



ただで、そのまま席を立て、官邸の広場に集まったユデア人の騒ぎに出かけてしまい、ついに永遠に、キリストの答えを聞かずじまいになりました。ちょうどそれと同じように私たちも、たとえば小さな昆虫の持つ、想像を越えた本能の働きに驚嘆し、その本能が親の仕事の模倣でも教えられたのでもなく、実に生まれながらに備わっている驚くべき能力なのだと認めながら、そして、当然、心の中では「いったいどうして？」という疑問の声の起こるのを聞きながら、も一つ真剣にその疑問に対する答えを求めないままに、ついに永遠に一つの重大な真理を見落としてしまっているのではないのでしょうか？

本能は「習得した知恵」ではなく「注入された知恵」といわれます。「注入された知恵」……よくわかっていただきたいと思います。この注入された知恵のよって来る原因を、突きとめようとして、ある人々は、ソヴィエトの生物学者バヴロフの「条件反射」という唯物論的学説に基づき、非常に複雑な反射活動として説明するという、むだな努力を重ねているようです。けれども、これは絶対に意識外の反射活動によって説明できるものではありません。くまん蜂が他の昆虫のおなかにある運動神経の中核……それを捜し出すのには、深い学問と経験とを積んだ最も巧みな外科医でさえも、困難を感じる、その目にもとまらぬ一点を、ただ一突きで当てるといふ知恵や、落とし戸ぐもが、その巣を作るのに最も適した土壌を探り、そして、落とし戸を引き開けられな

いようにと足がかりになる穴をあけたり、果ては、かっこう鳥がその任務に進んでいくために他の鳥が協力するという状態が……つまり、生物の身体のある一部の神経が刺激されて、無意識的な反応を示すという限られた活動ではなく、その全存在が一つの意図を持ち、一つの目的に向かって、完全無欠ともいえる仕事をやり遂げるということは、バヴロフ流の条件反射等のあざかりしらぬところであるということは、少し注意して研究すればすぐにも知れることなのです。ですから、……実は、私は、このお話を準備しようと思っ、現在高等学校で使用されている、五、六種の文部省検定による生物学教科書を手許に揃え、この問題について、教科書がなんと言っているかを確かめてみました。そのうちのただ一冊だけが、相当のスペースをさいて、それを反射活動で説明しようとしているだけで、他のすべての書物は、「本能と知能」の項で、ただ、本能を生まれつき備わった能力であると断定することだけで満足しています。私は、これらの書物が文部省検定の教科書なのですから、もちろん、それから先のことは、それを教える教師の力量に委ねられてあるということが、きわめて賢明なことだ、とは思いますが、けれども、教師たちが、それから先の「なぜ？」を、も一つ真剣に突きつめるだけの勇気を欠いているなら……そして、新しい文化人というレッテルをはぎ取られることを恐れて、それをバヴロフ流の反射活動の複雑なものだというような、教師自身よく理解できるはずのない説明で、ごまかそうとする



なら、次の世代の日本も今日と全く同様に、全人類が知らねばならぬ、たった一つの真理を見失ったままの、昏迷の日本になるだろうと、私は、それを恐れるのです。

有名な昆虫学者ファーブルは敬虔なキリスト教徒でした。ある時、生意気盛りの学生たちが教授を捕えて

「先生のような大科学者が、なぜ、神の存在などを信じていられるのですか？」

と失礼な質問を發しました。が、ファーブルは柔和な微笑をもって答えました。

「私は、神の存在を信じてはいないよ。」

學生が、驚いて

「でも先生は毎日曜日、教会に通って神を礼拝していらっしゃるではありませんか。」

と言ったとき、ファーブルは静かに學生をさとして、こう答えたということです。

「信ずるとは、目に見えないものがあると思うことだ。私にとって、神はただ信仰の対象であるだけじゃない。小さな、目にもとまらぬ小さな昆虫を通じて、私は、この目で神を見、この手で神に触れているからだ。」と。

私は、今、ふと、パスカルの有名な言葉を思い出します。

「生半かな學問は人間を神から引き離す。しかし、真の學問は人間を神に結びつける。」

と言った、あの有名な言葉を……。

唯物思想がはびこり、科学万能の人の傲りが支配している現代において、神の存在を認め告白することは、あるいは勇気のいることであるかもしれません。けれど、神を見失った人類が、わずかここ一世紀ほどの間に、陥ち込んで行った底なし沼のような混乱と不安とは、もうそろそろおしまいにしたいものです。

いつか、私は、全人類の知らねばならぬ、たった一つのことを、もしも、あなたが謙虚な気持ちで学びたいと望まれるなら、あなたのお庭の片隅でコロコロとすだく秋の虫が、あなたにそれを教えるでしようと思しました。秋も深まって、やがて死に絶えて行く前に、おのが種族を残そうと異性を招く、秋の庭のロマンチックなラヴ・ソング……それは同時に、この世に生命を与えられた小さな秋の虫たちが、口を揃えて奏で上げる、神の栄光の讃美の歌でもあるのです。天地万物と共に、大自然の中に美しく謙虚に溶け込んで、全人類こそって神の栄光をたたえる平和な日の訪れるのは、ああ、そも、いつのことでしょうか？ その喜びの日の訪れの一日も早くからんことを祈りながら、今夜はこれでお別れします。

では皆様、さようなら。